

宮崎県立看護大学大学院看護学研究科科 平成26年度修士論文要旨

卒後2年目看護師の看護実践の能力 を高めるための指導方法 — 対象理解を深め必要な看護を 見出し実践するために —

蔵満 美和子 (基礎看護学)

【キーワード】 卒後2年目看護師・看護実践能力・
指導過程・指導方法・対象理解

本研究の目的は、卒後2年目看護師（以下看護師）が対象理解を深め必要な看護を見出し実践するための指導の視点を明らかにして、専門職者としての発達を支援するための指導方法を明らかにすることである。研究対象は、看護師に研究者自身が直接関わった指導過程における指導者の認識である。その指導過程において、対象看護師が変化した場面及び対象看護師が関わったことによって患者によい変化があったと思われる場面、指導者が指導の必要性を捉えて関わった自己の指導過程から指導場面を抽出し、6事例から20の指導場面を分析対象とした。作成した研究素材分析フォーマットをもとに、指導場面から23の研究素材を抽出し分析を進めた結果、57の指導の特徴を抽出した。次にそれらの共通性・相異性を比較・照合して抽象化をすすめ、指導の視点として、・患者のその人らしさに関心を寄せられていない時には、その人らしさにつながる特徴や思いを表現する、・患者の位置から追体験できたことを評価できた時には、そのことを認め支持する、等を含む25の指導の視点を抽出した。

さらに、抽出した指導の視点の全体性をおさえ、看護過程を展開する上での看護師の課題に着目し、課題に応じた指導方法について分析を進めた結果、看護実践上の課題から、指導の時期として、1. 対象理解を深めることを支援する時期、2. 自立した

実践を支援する時期、3. 自己評価を促し課題を見出すことを支援する時期、を定めることができた。そして課題に応じた指導方法の分析を進め、各時期における課題と指導方法の関連性を、図；卒後2年目看護師の看護実践上の課題の特徴に応じた指導方法として表すことができた。対象理解を深めることを支援する時期においては、・患者の反応に関心を寄せない時には、患者の反応を問う、等の指導が必要である。自立した実践を支援する時期においては、・追体験した思いを表現できる時には、認め、支持する、等の指導が必要である。自己評価を促し課題を見出すことを支援する時期においては、・自己評価の意味に気づくが課題を見出していない時には、今後の課題を問う、等の指導が必要である。

以上より、看護師が対象理解を深め必要な看護を見出し実践するための指導方法について考察を深めた結果、指導の視点と関連図の活用は、ベナ-の指摘している「一人前レベル」の到達レベルに向けた、個別的・段階的な指導方法として意義があると位置づけることができた。活用においては、指導の視点を断片的に活用するのではなく関連図において全体性を捉えた上で活用すること、展開されている看護の状況を見極め、看護実践上の課題を意識して関わることでより効果的な指導としていくことが重要である。

看護師が、一つ一つの看護の経験を積み重ねていく過程で、その経験をもとに看護であることに自信をもてるような支援をしていくことが、この時期の関わりとしては重要と言える。